

旧住所 名古屋市瑞穂区直来町
最終学歴 大連満鉄育成学校
入隊 昭和二十年五月二十一日 満州東
寧(部隊名失念)

軍歴 歩兵(終戦時) 陸軍一等兵

終戦場所 東寧 勝鬨山
復員後の経歴 昭和二十四年一月 運輸会社入社
昭和二十四年六月 退社
昭和二十四年七月 名古屋市交通
局入局
昭和五十七年一月 名古屋市協力
入会
平成三年六月 退会

(愛知県 河村 廣康)

シベリア追想記

愛知県 高木 勝 巳
(旧姓 山下)

昭和二十(一九四五)年の終戦を奉天(瀋陽)でむかえ、武装解除後の九月十八日客車に乗せられ新京(長春)・ハルビン・黒河・ブラゴエシチエンスクを経由して、十月の末カザフスタン・サマルカンドに到着しました。

収容所名は失念しましたが千五百人の長は山口少佐だった。湖の対岸にある収容所に、囚人と入れ替わって入所。私は三カ所の収容所を変わりましたから、サマルカンド第一・第二、カラカンド第一として話を進めます。一舎屋に二、三百人。真ん中は通路で二段ベッドになっていたが、囚人の置き土産で南京虫と虱に夜も眠れず悩まされた。血肉を分けた兄弟ということか。

十一月初めごろから毎晩点呼があり、人数を数

えるに二時間も三時間もかかる。教育を受けたことの無い兵隊だから無理もないが、寒空に立たされてる身にもなつてくれと言いたい。また夜は夜で大掃除を一晚に三回ぐらいやらされると朝方になつてしまい、私物の荷物も千人針も日の丸の旗も全部取り上げてしまう。態のいい略奪だ。

十一月の中旬になり、始めて碎石の労働に出る。食事は三度だが、黒パン三五〇グラム。スープ約二〇〇cc（これが離乳食みたいなもの）。これではと思ひ最後の方なら中味が濃いと考えたが誰しも同じ考えだった。作業場は猛吹雪で一メートル先が見えないほどで立っているのがやっと。道具はツルハシと鉄棒。これでは仕事にならない。昼食は野菜スープだが、野菜の切れ端が二、三切れ、まるで水と同じだ。乏しい食事に寒さと、ろくにない道具での重労働に、ソ連人たちは、「これでは、この一冬に日本人は死ぬだろう」と話していたと後になって聞いた。

翌年の一月になり、私は技術的なものはないか

ら、工場の建設、ダム工事、採石、道路工事などの中で工場建設に回された。食事は一向に良くなり、今までのまま。舎屋に帰り疲れた骨と皮ばかりの体を横にすると、待つてましたとばかり、南京虫やシラミの襲撃におちおち眠ることもできず、栄養失調と睡眠不足で、故国へ帰る夢も空しくシベリアの土になつてゆく戦友たちは哀れだった。

最初のうちは十日に一度、直径二十センチばかりの手桶一杯の湯で体を洗う入浴というものがあつたが、いつの間にかそれも無くなり、帰国のためナホトカに着くまでなかつた。

病気をしたら薬も無く死に至る者も少なくなかつた。腹痛や下痢などは消し炭が唯一の薬で、これを飲むと不思議に治るから、いつも持っていた。気温がマイナス三〇度になると外の作業は中止する決まりになっているが、サマルカンド第一ではノルマ達成のために、マイナス三〇度以上になつても作業は続けられた。

昭和二十一年の春が来た。食べ物に餓えていた

私達は作業場に着くやいなや、青いものが目に入ると監督の制止も聞かず我先にとその青草に突進した。とにかく口に入る物はなんでも食べました。

秋になると夏植えたジャガイモの収穫の時期で、あの手この手を使ってなんとかジャガイモを確保するのに一生懸命だった。

ソ連はノルマには厳しかった。フラフラになって舎屋にたどりつくと、未だノルマが達成されないとそのまままた作業場に追い返される。その悔しさは今でも忘れないほどだ。

私達はただ生きるためにも食べ物欲しかった。夏になると冬の外套をパンに換える。毛布も食糧にしてしまう。そのころ戦友の一人がソ連の女にフンドシをパンと換えた。翌日その女がフンドシを頭に被って歩いているのを見て私達は笑い転げた。

そのころの履物は木靴だった。サンダルです。これを履いて建設や運搬、穴掘りなど、まともにできないのです。足に怪我をする者が多かったが、

でもやらなければならず大変な苦勞をしました。

昭和二十一年晩秋に、サマルカンド第二収容所に移動した。作業の内容は前の第一と同じだった。たしか翌年昭和二十二年の二月十日ごろ、三日間の食事制限があった。猛吹雪が続いて輸送が途絶し、食糧が届かないという。毎日三食とも塩スープに十二、三枚の葉っぱが浮いているだけ。それでも作業はさせられた。ただでさえ食事が少なくフラフラなのに、水腹では皆倒れそうだった。これは、なんのことはない。食糧を横流ししたためと分かった。私は腹が煮えくり返るほど、許せないと思ったが、これも、「泣く子と地頭には勝てぬ」の例えだ。

体はやせ衰え体力は限界にきている、こんな体では二十三年の冬はとでも越せない。と覚悟をした。

しかし、転機がきた。秋になり「ダモイ」の声に起されて車に乗った。着いた所はカラカンド収容所だった。ここで私は助かった。

はがきの手紙が出せた。ソ連兵からは「ハラシヨラポーター」とだけ書けといった。皆は「そんな事書けるか、恥さらしだ」とわいわい騒いだ。

私は余分なことは書かなくても、生きているということが分かればいいと思ったので、書かない者のハガキをもらい、一通は家に書いた。後の四、五枚は共産党や徳田球一や俳優宛に書いた。半年ほどたって返事がきた。家からは「早く帰れんのか」と書いてあった。戦友たちにも返事が来た。

「お前みたいな者は祖先に対して恥だ。腹切つて死ね」「私が一生懸命田畑を守るから何も心配せず、体にかけて病死にならないように気をつけてください。」皆涙を流しながら読んだ。

これでソ連側の餌は、食事の増減。帰国、手紙で、私達を操った。

私たちの体格検査は、素っ裸にして女軍医が尻をつねって、肉のつき具合で、一級・二級・三級・OKと区別する。一、二級を多くすれば高いノル

マを設定し働かせることが出来る。鶏の選別じゃあるまいしと思い、クルツとまわったら女医が「オー。ヤポンスキー。マーリンキ。」（日本人のは小さい）と言った。この身体検査は、骸骨の標本を並べたようなものだ。

このカラカンダ収容所の隊長は吉田大尉で熊本県出身のフジ部隊と聞いた。第四中隊第一小隊第一地区に編入された。作業は炭鉱と知った。一番の魅力は食事が多い。黒パン四五〇グラムとスープと粥の量も多い。寒い地上作業をしなくて済むことが一番嬉しかった。

二十二年、二十三年の冬はこれで乗り切れた。坑内作業は危険だとかどうか。どちらでもよかった。坑内から出るとシャワーを使えるから、蚤や虱とお別れすることが出来た。女湯を覗いて、頭から水をかけられたこともあった。

炭鉱仕事は確かに危険だ。私の目の前で天井の石炭が頭上に落下したが、命に別状無く入院の末、帰国したと聞く。作業は一日三交替。一地区十三

人。石炭壁をダイナマイトで飛ばしてコンベアーに入れる。監督、発破手はソ連人。助手はソ連の女性。柱立てはソ連人だったが、いつの間にか日本人がやるようになった。私達のほうがソ連人より出炭率が多い。私はタバコは吸わないがタバコなどもくれる。こんなことがあった。機械が故障した。仕事はストップ。技術者が修理したが駄目だ。そのうちに帽子を投げ出して泣き出した。彼は共産党員で生産をストップさせ、ノルマ達成が出来ない責任を問われるから、明日はカルツ（監獄）行きとなるかもしれぬからだとか。

私達の情報は日本新聞が頼りだ。「現在日本は天皇制がどうか。プロレタリア革命だとか。帰国が遅れているのは日本政府のせいだとか。」

二十三年の冬も無事越し元気になったが、そのうち一日中腹がいつぱいでおかしいと思っていると、ソ連人が「お前の目が黄色い。仕事に来るな」と言う。医務室に行くと、既に二、三百人ほどの同じような患者がいた。ソ連側も慌てて将官が来

て隔離された。ブドウ糖を打たれたら効いたようで、みるみる元気になったが、一カ月ほど隔離されていた。どうも流感らしかった。

収容所に帰ると作業隊長になって地上作業になった。病気がりなどの寄せ集めの隊員たち。刺青を入れたおっさんもいた。有り難いことには、ノルマの未達成は一度もなく、よく協力してくれた。

そして、労働賃金が支払われるようになった。一人当たりの約四百ルーブルだったが、この分配でひと騒動あった。賃金の基準は炭鉱従事者だが、炭鉱仕事は危険で嫌だと逃げ、他の仕事をしている連中が、「同じ日本人だ、平等に分配せよ」と、勝手なことを言う。

さて金はもらったが食うことしか使い道が無い。毎日のように食堂に足を運び使う。

このころ民主運動が烈しくなる。日本新聞を見ると、赤旗の歌を歌わなかったと言って、ナホトカから奥地へ送り返された記事が載っていた。サ

ア大變。収容所から作業に出るとき、作業から帰ったとき、赤旗の歌、インターナショナルなど革命歌を声張り上げて歌った。私は思った。帰るまでは赤になっていよう。日本に帰ったら黒でも白にでもなろう。自由にと。

昭和二十四年の八月か九月ごろ、全員集合がかり、「これから名前を呼ぶ者は外へ出よ」と、そして二、三百人が指名された。よくその人たちを見るとフジ部隊の古兵がほとんどで、昨日まで先頭に立って民主運動をしていた者たちだ。彼らは中国共産党に引き渡されたとかの噂が流れたが、行き先は分からない。その後会うこともなかった。私達に、また残金だとルーブルが支給されたが、日本へは持って帰れないと聞いていたから、綿入れの防寒服と革靴を買った。

昭和二十四年九月中旬、ダモイ列車に乗る。隊長は吉田大尉。列車の中でも油断できない。嬉しい顔をしようものなら吊るし上げになりかねない。ナホトカは第一、第二、第三と収容施設が分かれ

ている。第一は民主化の総仕上げやラポート。第二は同じ。第三は税関みたいなもので、不許可の者は全部没収された後、乗船となる。密告者がいるので、心はうきうき、気はそぞろだが、顔は神妙に怖い顔をしていた。船名「永徳丸」の引揚げ船が港に接岸した。タラップの下でソ連兵が名前を呼ぶ。答えて、氏名・生年月日をいう。ハラシヨードワイだ。スターリン大元帥万歳。ソヴェト労働者諸君万歳。共産党万歳と叫んでから、タラップを駆け上がる。

船の上からフト岸壁を見ると、一人の人がしょんぼりと寂しげに立っている。よく見るとカラカランダの中隊長ではないか。乗船直前、誰かに密告されたと思う。その後どうなったか。

船は岸壁を離れる。港を出たところでソ連の係官が下船した。船内では何かごたごたがあったようだ。もう二度と来るものか。

昭和二十四年九月三十日舞鶴上陸、自宅には十月四日敷居を跨いだ。両親は佐世保駅まで出迎え

てくれた。母は「どこにも怪我はないか。」と身体をなでた。

十八歳で佐世保駅を出発して入隊し、復員したときは二十四歳になっていた。この間の年月は無量である。

不幸にしてシベリアに倒れた戦友たちの魂よ。安らかに眠れと祈るのみである。

舞鶴まで来て投身自殺した人もいたという。なぜだろう。

どこかの総理大臣が「百年の仇敵は存じない。」と言った。しかしその後の句はない。

そう、「大怨を和するものも必ず余怨ありと。」それでは皆様お元気で余生をお過ごし下さい。

【執筆者の紹介】

生年月日 大正十四年三月五日

現住所 愛知県愛西市諏訪町

旧住所 長崎県北松浦郡鹿町大加勢

最終学歴 長崎県佐世保市私立西海中学校

軍歴

昭和二十年三月二十日 満州六二三部隊

昭和二十年六月 幹部候補生教育のため 第一二四部隊転属

昭和二十年八月十五日 終戦 陸軍上等兵(奉天首山野戦照空第六大隊)

昭和二十四年九月三十日 舞鶴上陸

昭和二十四年十月 愛知県津島市津島ガス株式会社就職

昭和二十四年十一月 長崎県北松浦郡鹿町町日鉄北松鋳業就職

昭和二十五年六月 退職
姓を高木に改姓 住所 東松浦郡北波多村に移転

自由業

昭和六十年三月 工場長兼ガス主任者を以って定年退職

昭和六十二年以降 約十年間技術系

結婚

復員後経歴

追記

の職場を転職

昭和十八年三月 満州国官吏専売総局採用

昭和十八年十月 チチハル専売所勤務

昭和二十年三月 入隊のため休職
(愛知県 河村 廣康)

抑留体験

愛知県 鈴木 英一

私はシベリアには昭和二十(一九四五)年十一月から二十三年六月まで、二十歳から二十三歳まで抑留されておりました。東シベリアにチタという都市があります。知多半島の知多市とは姉妹都市となっています。このシベリアのチタ市から南西二百キロほどのところにハラゲンという小さな村があります。そして、十七〜八キロ、奥に入った電気も水道も井戸も何も無い山の中の収容所で伐採をさせられていました。

シベリアから帰国してもう六十余年となります。十年一昔、遠い昔のことのようにも思いますが、私には最近のように感じます。

シベリア抑留生活は思い出すのも嫌なことで、あまり他人にお話ししたことはありませんでした。ところが十年ほど前のことでした。